

高度に発達した医学は魔法と区別がつかない

第一話

●モノローグ

人口 1,000 人当たりの医師数 0.4 人。

これは OECD 加盟国で最も人口あたり医師数の多いオーストラリアのデータである。

一方、日本はその半数にも満たぬ、人口 1,000 人当たり 0.4 人に過ぎない。

これは OECD 加盟国の中で下から 8 番目と決して多い数ではない。

ましてや国内で最も人口あたり医師数の少ない岩手県では、この数字は 0.2 人まで減少する。

つまり各県のこの現状にあって、まだ一人の医師もいないのが現状だ。

山岸「うつむき加減に奥沢へと告白する。」

山岸「奥は僕のせいなんだ……」

奥沢「……どうのことだ？」

山岸「本当は僕が奥沢のはずだったんだ。ただそれを知った天海くんが……」

奥沢「……まさかあいつ、お前の子供の件を知って？」

山岸「小さく一つ首を縦に振る。」

奥沢「あいつらしいといえば、らしいが……まったく」

ため息を吐き出した奥沢は、覗かれた天海のビールジョッキに手を伸ばす。

奥沢「しかし酒を入れた状態で診察に向かうなよな」

山岸「あ、いや、それノンアルコールだよ」

天海の残っていたビールに口をつけ、舌打ちする奥沢。

奥沢「……ちつ、確かにそうみたいだ」

山岸「天海くん、首はお酒が好きだったけど今は角と飲まないみたい。自分の患者に何かあった時、後悔したくないからって」

奥沢「……まったく本当に首から不器用なんだよ、あいつは」

病院にたどり着き、病衣に着替え白衣を羽織りながら内視鏡室へと足を踏み入れる天海。

天海「止血術を始めます。EVLの準備を」

● 京都大学附属病院総合診療部

小さな子供が診療席に腰掛けておりその背後には若い母親。

天海はモニター上にある骨のレントゲンを指差しながら説明を行う。

天海「遺伝子検査の結果、PHEXという遺伝子に変異がありました」

その後、目の前の患者である女の子と母親へと向き直る。

天海「診断は低リン血症性くる病。でもお薬を飲んで、良くなってきています。まずは安心ですね」

そう口にする、天海はたどたどしい笑顔を少女へ向ける。

突然、女の子は天海に抱きつく。

女の子「おじちゃん。ありがとう」

モニオ



内視鏡的静脈結紮術(EVL: Endoscopic variceal ligation) - 内視鏡(胃カメラ)を通して緊急時(出血時)あるいは予防的に静脈瘤を治療する方法

いつの間にか島民たちはいなくなり、完全な深夜となっている。
地面に傾たわっていた天海はゆっくり体を起こすと、片手で頭を抑えながら冷蔵庫からスポーツドリンクを取り出す。
天海「は……気持ち悪い……やっぱり酔っ払いにアルコールが合うなんてエビデンス、何処にも無いはずだよ」
明らかに顔色を悪くしたまま、傍にあった飯盒バッグに違い寄る。そしてプリンペラン（吐き気留め）をスポーツドリンクで飲むとする。
しかし次の瞬間、暗闇が落ち視界が真っ白となる。

光が消え診療所の中は食べ物や採いの品が散乱している。
いつの間にか診療所は、次の瞬間に森の中へと転移している。
しかし建物の中に天海は居ない。

●死の森の道（奴隷商人）

森の中、奴隷商人が馬車に乗り道を行く。
周囲には護衛の人間冒険者数人と、首輪を繋がれ歩かされている猫獣人（コロネ）。
コロネは粗末な服に傷だらけの格好で、転んでしまい、馬車の進行が止まる。

冒険者（クレイン）「おい、しっかり歩けよ、このグズー」

首輪を繋がれたまま四つん這いの状態のコロネを罵飛ばす冒険者。
地面に転がされ、もがくコロネ。

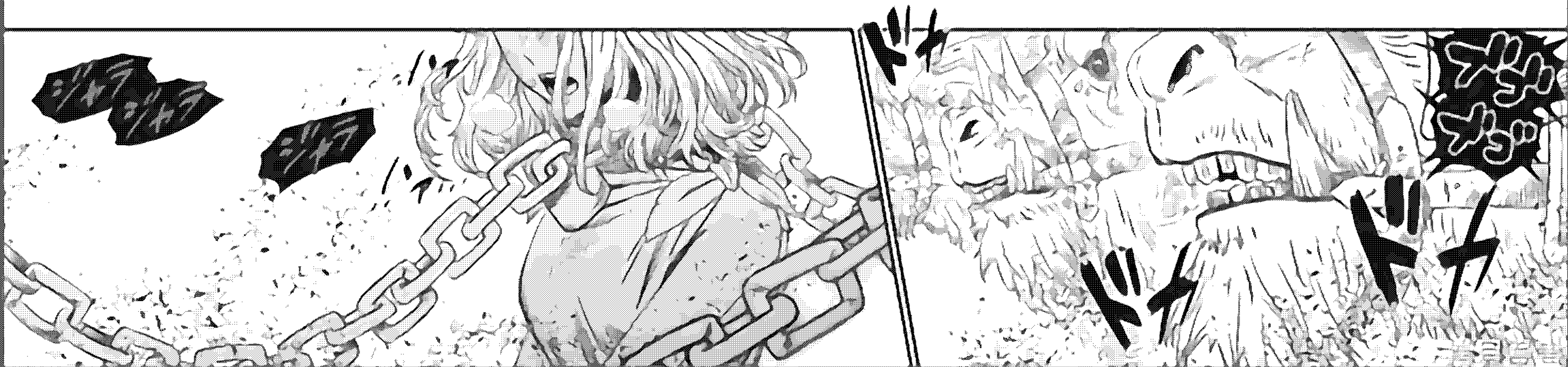
奴隷商人「おやおや、困りますねクレインさん」

奴隷商人「治療魔法師に掛からせると完全に赤字です。ゴミとはいえ商品なのです。もう少し大事にして買えませんか」

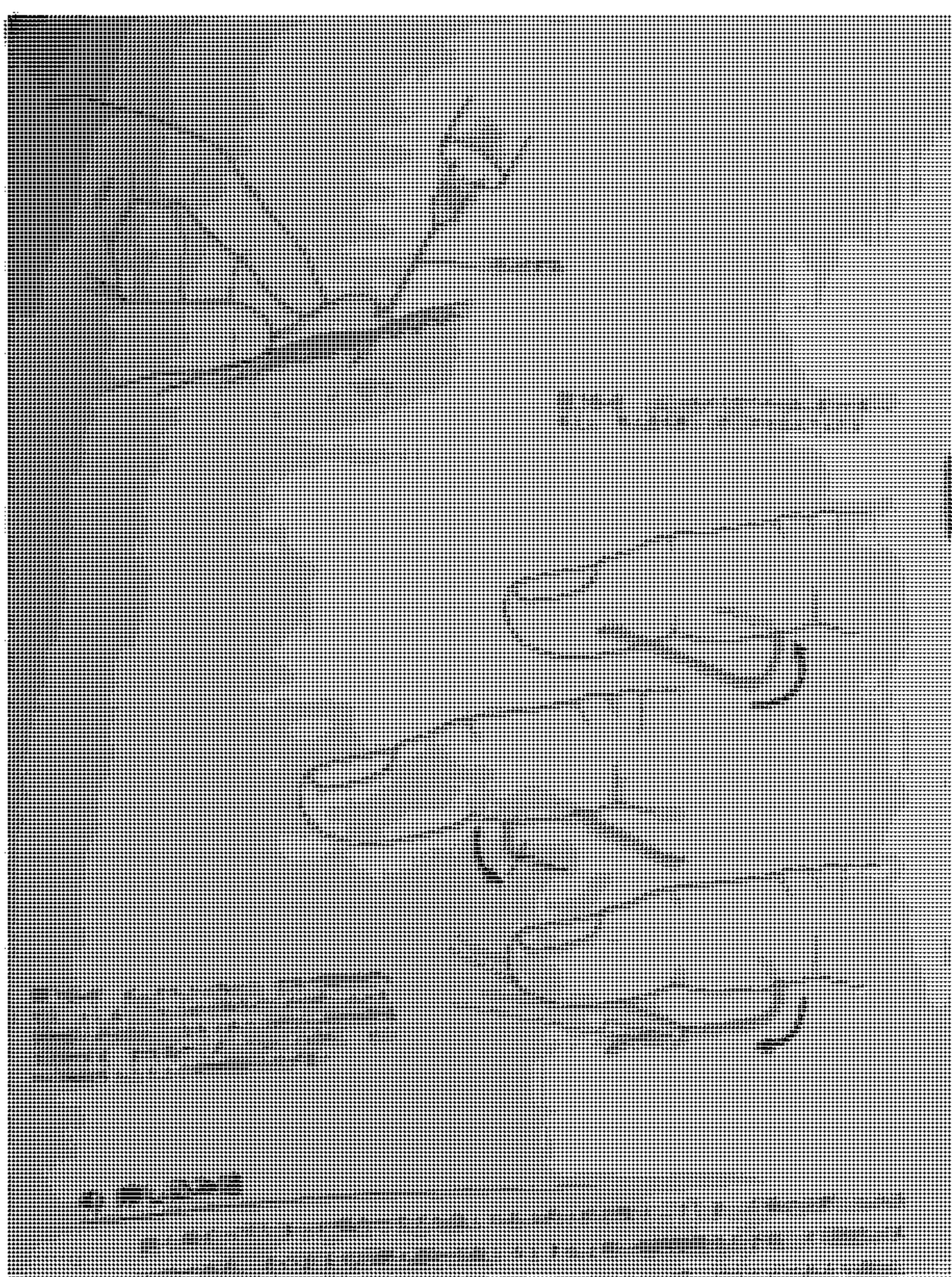
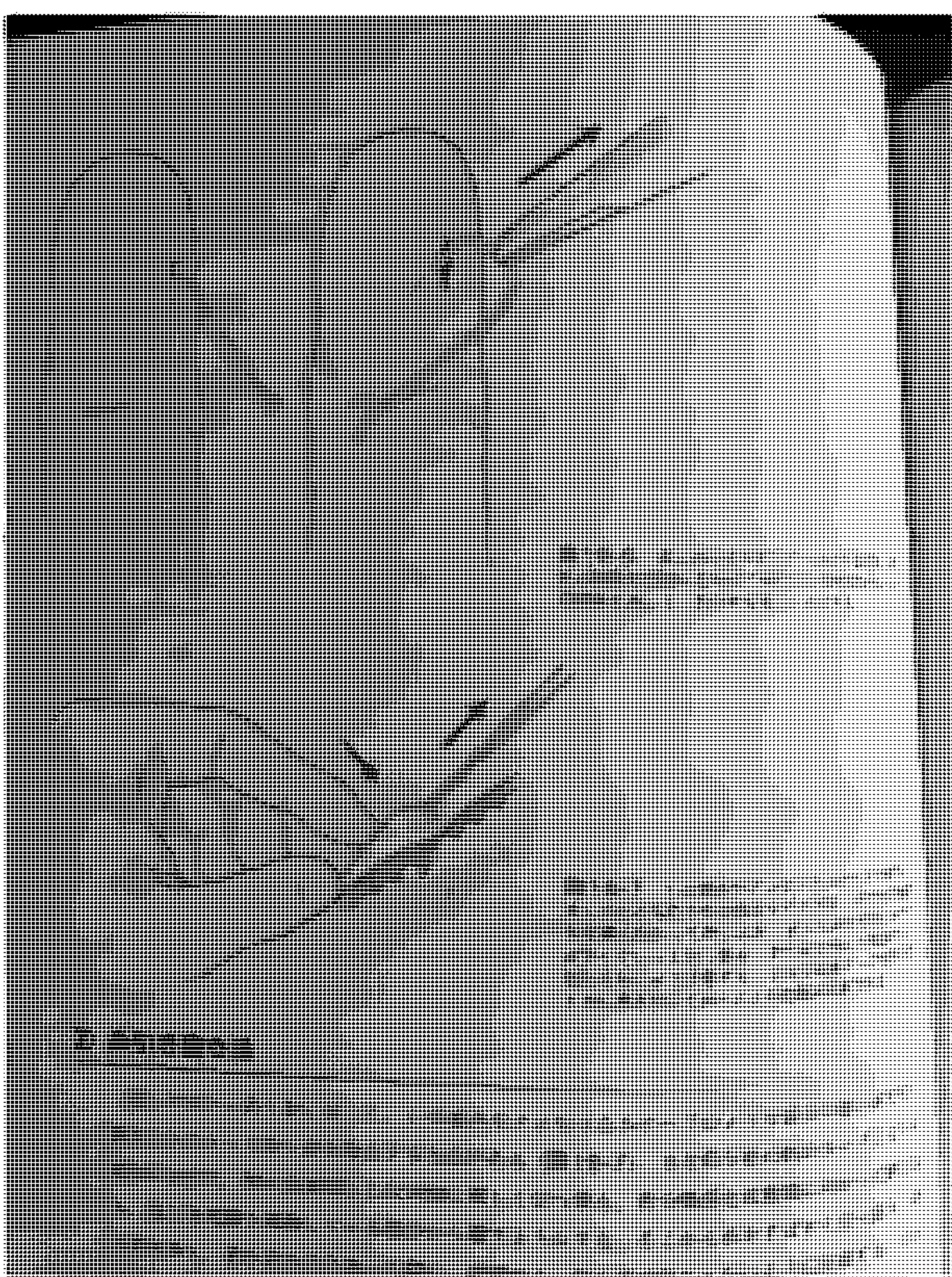
クレイン「ですが旦那、こんな貧乏な奴人が売れますかね？」

奴隷商人「奴隷として売れなくとも、箱先一本髪の毛一本にいたるまで使いみちはあるですよ」

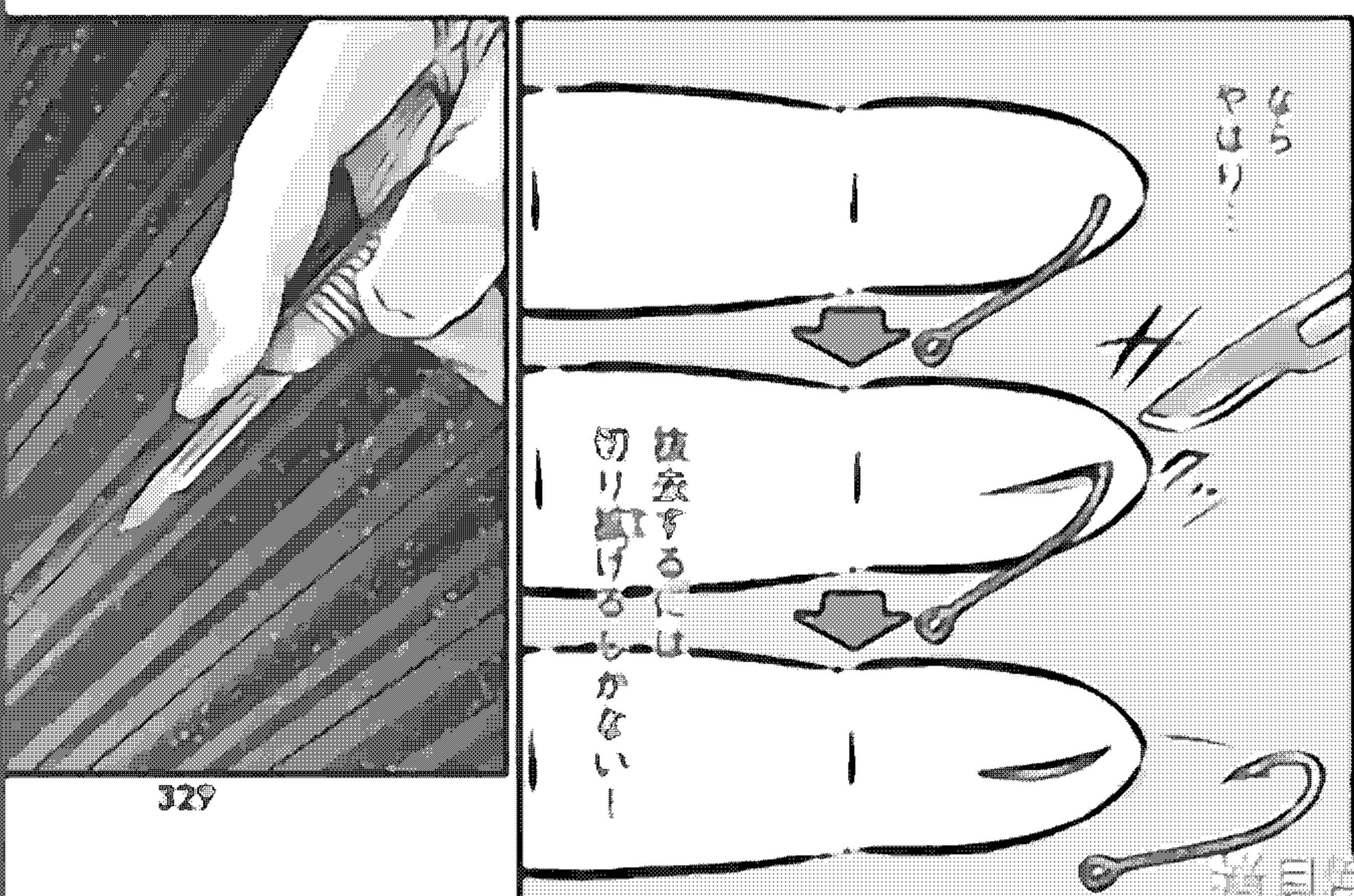
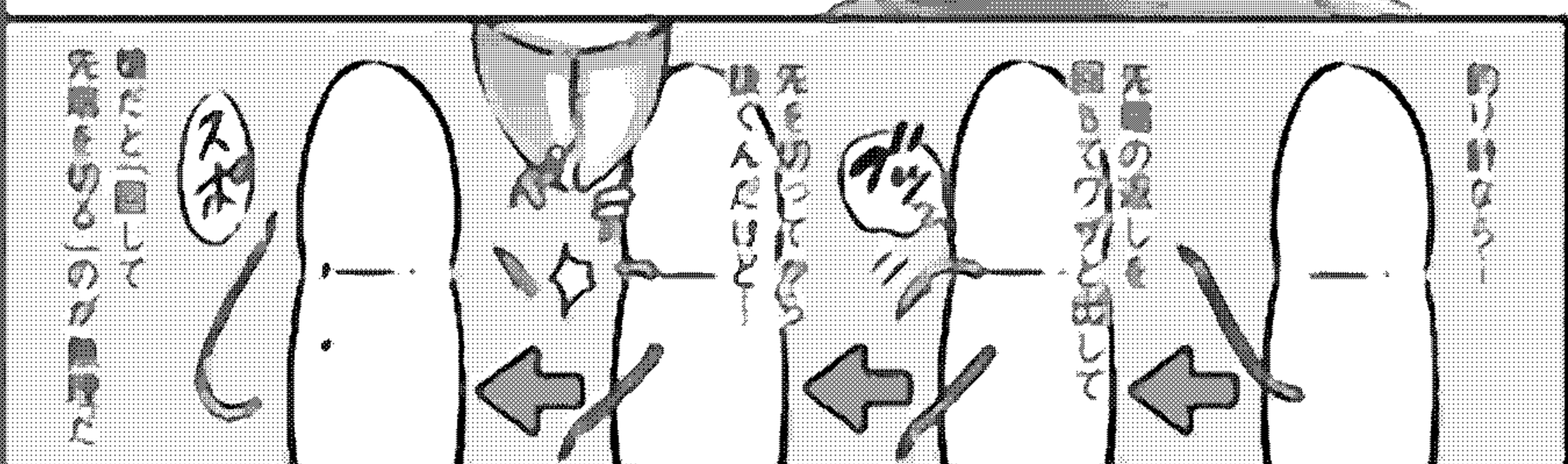
奴隷商人「それにそのゴミをいくらで仕入れたと思ってらっしゃるのですか？」



天海「そうだね。釣り針なら皮膚側に先端を回して抜くこともできるけど、槍だとこの返しが付いている部分を切らないと突起物は抜けないからさ。」



(注 もし可能なら釣り針の二種類の抜き方を図示できれば。また作画に必要あれば書籍かPDFデータなどお送りします。)



天海「キミ、キミ、大丈夫かい？」

荒い息だけ繰り返す猫獣人。

天海「愛わった耳……いや、その前にこの荒い呼吸は……ん？」

キマイラ「グオオオー」

遠吠えを上げながら、森の中から愛を表すキマイラ。

思わず後ずさりかけ、スマホを取り出すも圏外の表示。

天海「圏外……ここは本当にどこなんだ」

天海「顔相手だったら死んだふりするところかもしれないけど……仕方ない」

意識を失った女の子を抱えたまま、僕で逃げ出す天海。

しかし女の子の重みもあり、駆け出すもすぐに思わず転んでしまう。

すると、偶然キマイラの突進を避けてしまう天海。

キマイラは林の中に突っ込む。

その勢いで倒される木々を見て、顔を青ざめる天海。

キマイラは向きを変え、今度はゆっくりと少しずつ迫ってくる。

天海「はあはあ……鬱つたな……どうせ死ぬなら頭痛薬でも飲んでおきたかったけど、どうやらそんな暇はない……か」

地面に腰を抜かしたようにうずくまる天海だが、女の子だけは救おうと彼女に覆い被さる。しかしキマイラ襲ってこない。

恐る恐る振り返ると、スライムが彼らの前に立ちはだかっていた。

天海「キミ……」

スライムとキマイラは互いを見つめ合い一歩も動かない。

結果、キマイラはしぶしぶ撤退、スライムはゆっくりと振り返り天海と向き直る。

天海「……助けてくれたのかい？ 圏外と圏内なんだね」

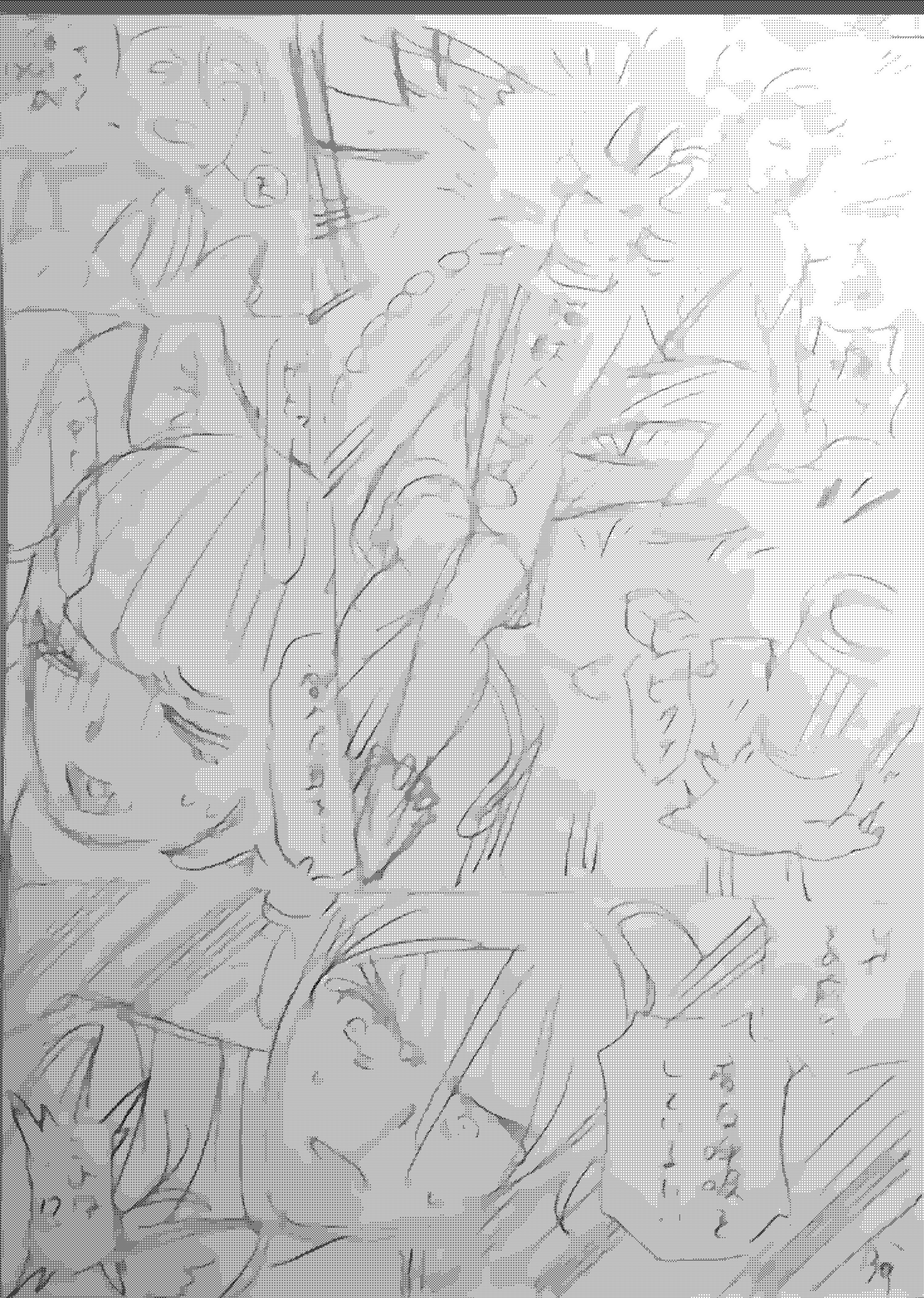
天海「って、キミ、キミ、大丈夫かい？」

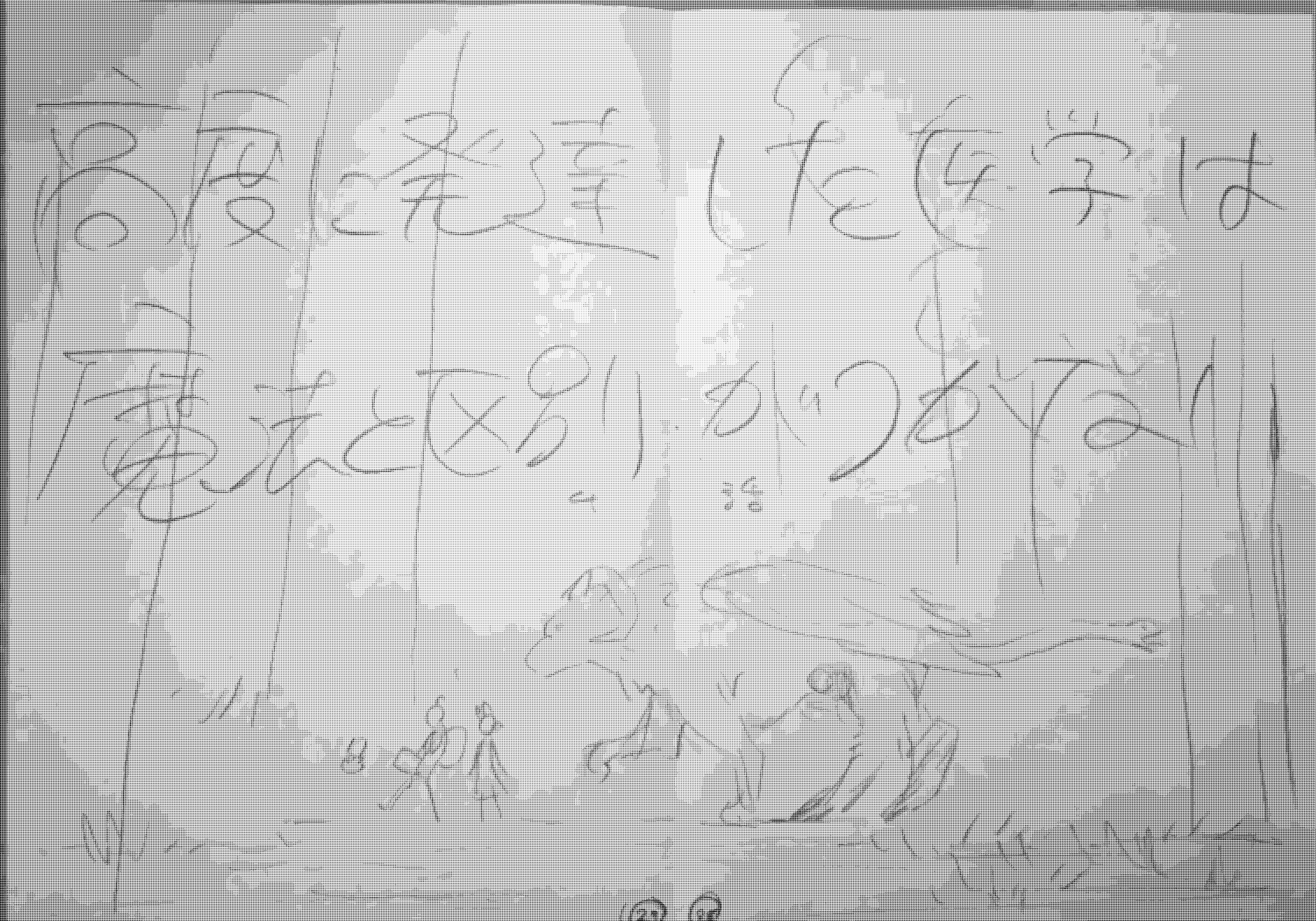
守ろうとしたコロネに意識を移すと、全身に発汗が出て苦しそう呼吸を繰り返している。

天海「この子が何者かはわからないけど、この発汗はアレルギー？ でも……」

スライムが天海の服の裾を引っ張り、先導するように動き出す。

天海「着いてこいって言ってるのかい？ でも確かにここだと、さっき







第一話

決定稿

高度に発達した医学は
魔法と区別がつかない

NOT FOR SALE